

## 西賀茂川上郷・山の森社の旧跡

平成廿年六月十五日

藤木 文雄

### 山ノ森神社—歌枕浮田森(山城名勝志所引)。

鎌倉以前創建の古社で上賀茂社の末社(祭神素盞鳴命・田心姫命・稲田姫命)。室町時代は貴船大明神と称し社殿を囲む林(社叢)と神田山杜<sup>まもりた</sup>田6 筆6反半があった(須磨千頤「賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究」)。

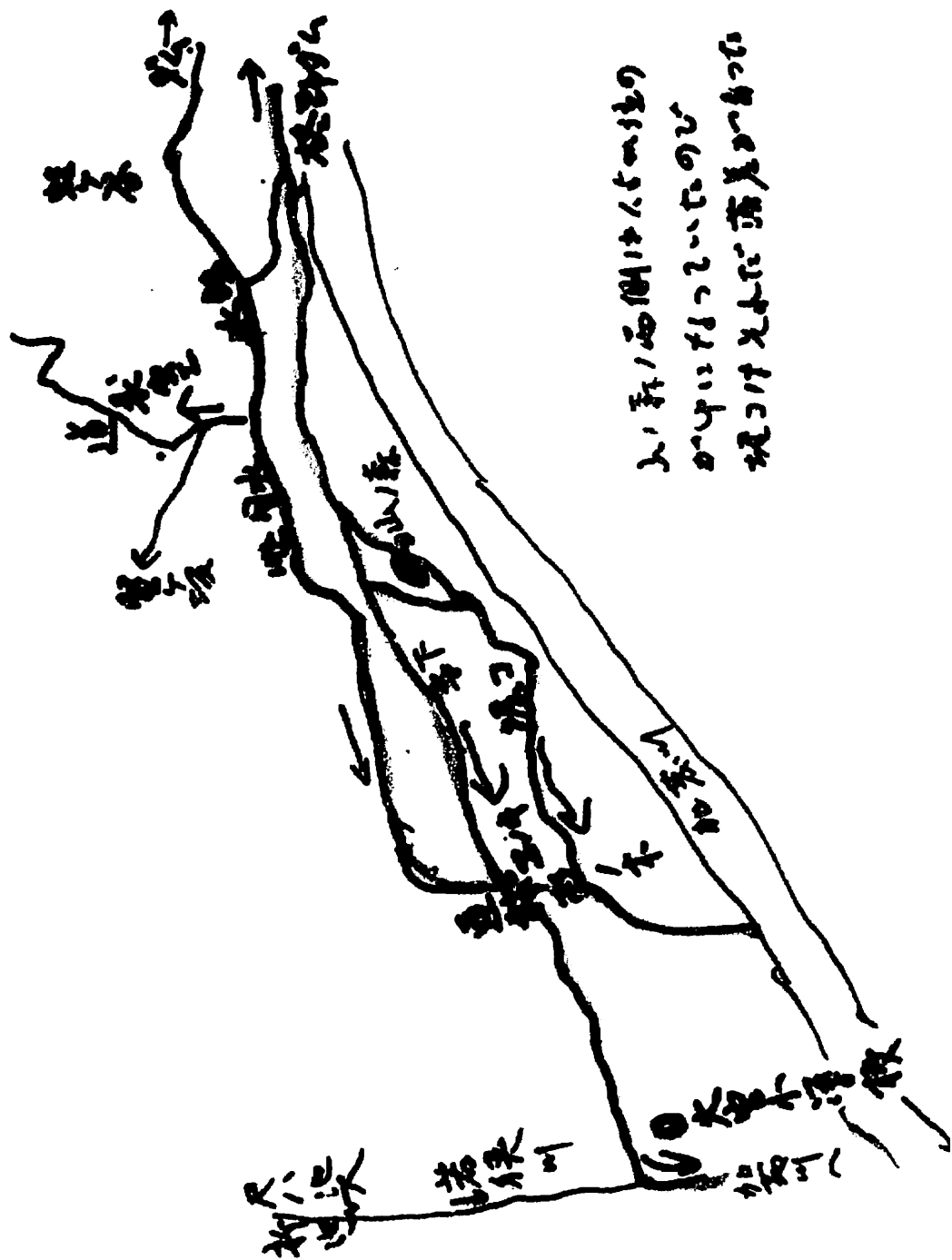
旧京都府愛宕郡大宮村志<明治44年>は山の森社の所在を「大宮村字川上」とし、「官有地288坪、浮田の森」とする。その地は現西賀茂北山森町北辺で、同井ノ口町との堺にあたる。また村志には本村字山ノ森で賀茂川から分流する堀小川(賀茂社の堀川井手)と、川上用水が合流し、ここから南流する「堀川の源流」と記してある。川上用水は西賀茂檜谷、同蛙ヶ谷、同下庄田町三町の堺の檜谷川堰堤から取水して山麓の東を南下してくる水路であるが、堀川はいま暗渠になって全く見えない。因みに後鳥羽上皇の川上御幸の地の川上水練池もこの辺りの川上瓦(河原)屋にあったとも考えられる(大日本史料 實躬卿記第四の乾元元年三月七日条に神主経久の川上河原屋に亀山法皇の御幸があり蹴鞠に興じられたとある。翌乾元二年七月には同じく亀山法皇ご一統が経久の川上「水練池」の御所に臨み約八十年ぶりに後鳥羽上皇の川上御幸を復活したことを、経久の乾元二年日記に指図入りで記しているがそれもこの近傍であろう)。

通学区域境界地図(昭和30年)には旧地に鳥居形が記載されていた<須磨前掲書>が、現在山森社は昭和40年代の区画整理で奈良の小河の畔に合祀されてしまって、跡地も完全に宅地化されて痕跡も無い。なお川原屋を瓦屋と混じて表記するのはこの辺りが延喜式土工寮の瓦窯の跡地だからで西賀茂に七箇所検出されるうちの醍醐森瓦窯跡が近くにある。

賀茂本郷の故地である川上郷の地に由緒あるこの社を復祀することも検討課題である。

なお、山城名勝志は歌枕浮田の森に比定しているが、一方伏見区淀下津の伊勢向社の森とする異説もある。また、この山森社が洪水で流れ着いたところに半木(流れ木)社を祀ったとの説も残る。次に上掲文献以外の歌枕浮田森によせた有名歌人たちの和歌を示す。

- 『(後鳥羽上皇) この日かわかみへ御がうなる。せきまたしくてお、はやしよりかへらせ給ときこゆ (賀茂旧記、建仁2年<1202>6月15日条)』。須磨千頤氏はこの大林は前記の林で山の杜のことではないかとされる(私信によるご教示)。
- 『下草はすゑ葉ばかりになりけりうき田の杜の五月雨のころ』  
藤原俊成(続後撰集巻第四夏)
- 『春來れば浮田の森に引く注連や苗代水のたよりなるらむ』  
従二位藤原家隆(続拾遺集巻第二春)
- 『朽ちはつる袖のためしとなりねとや人を浮田の杜の注連繩』  
従二位藤原家隆(壬二集)
- 『山もりの森の下草狩り払ひ神垣祝ふ卯月なりけり』  
賀茂季鷹(雲錦集一、夏)



入、新ノ西側は八ノ川の  
 川に注いでいるので  
 視て付えおはる流るる